

自己表現活動としての自由短詩の臨床的有用性

—冠難辛句：サラリとこころの煙突掃除—

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻

山根 寛

2011年8月発行

作業療法（第30巻第4号）抜刷

□論考

自己表現活動としての自由短詩の臨床的有用性 —冠難辛句：サラリとこころの煙突掃除—

山根 寛*

要旨：抑制・抑圧された思いの解除は重要であるが、その表出は難しくリスクもある。詩歌の無意識内容の一次過程表現としての利点を生かしながら、詩作の素養がなくとも情動表出を可能にする自由短詩技法「冠難辛句」を考案して10年余り臨床で実施している。言語を用いる他の療法との比較、および実際に表現された自由短詩の分析から、季語などの約束事、字数制限、修辞技法がないこと、そして誘発語としての冠題の機能が、精神分析療法における言語化への抵抗や詩歌療法における技術的抵抗を軽減し、一次過程に近いが防衛的修飾の少ない二次過程表現を生み、発散やカタルシスをともなう深い交流の場を作る、本技法の臨床的有用性について述べた。

作業療法 30: 402~410, 2011

Key Words: (自己表現活動), (自由短詩), (冠句), 治療技法

はじめに

病気が荒ぶる時期を作業に籠もるようにして乗り越え1ヵ月足らずで退院していく人、退院のきっかけを失い道標を見失ったかのように入院生活が長引いている人、退院はしたが就労などによる社会への参加が困難で療養生活が続いている人、精神科作業療法の場にはさまざまなお人が訪れる。それぞれに、怒りや哀しみ、絶望感などさまざまな思いを、押し殺し（抑制）、押し殺されて（抑圧）生きている。そうしたさまざまな思いは、表出による解除が必要であるが、抑制、抑圧された思いを言葉にすることは

難しい。また、自然に消滅することではなく、作業療法の導入や経過に支障を来したり、時に病気の力を借りて噴出し、それがまた精神疾患に対する誤解や偏見を助長することにもなる。

そうしたまともに向き合えば、重くも苦しくなる、抑制、抑圧された情動の自己表現の補助手段として絵画や詩歌などが用いられている。絵画はその投影機能が、詩歌は無意識内容の一次過程表現^{*1}としての詩の特性¹⁾が、それぞれ精神療法や表現療法の一技法として用いられている^{2,3)}。しかし、絵画も言語化の段階で抵抗

2010年11月1日受付、2011年1月28日受理

Abreaction through free versicle technique

* 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻

Hiroshi Yamane, OTR: Human Health Science,
Graduate School of Medicine, Kyoto University

*1 フロイトの欲動説に関する精神分析学の概念で、快樂原則が支配する衝動的非合理的な「無意識」の過程を一次過程 (primary process)、現實原則が支配する知的合理的な「意識」の過程を二次過程 (secondary process) という。一次過程的表現とは本音に相当し、論理的調整がなされていない本能衝動に密接した原始的な表現を指し、置き換え・圧縮・象徴的表現が含まれる。

が生じることがあり、詩歌は俳句や短歌、連句などを媒介にしているため、そうしたことへの関心や素養が多少とも必要になる。また、言語や思考の病理性が強い統合失調症の場合には、夢の解釈や自由連想法などと同様の抑圧された無意識の内容の露出にともなう危険性をもはらんでいる。

こうした適応対象の限定やリスクが少なく、詩歌的な良さを生かしながら作業療法の活動の一環として、より日常的なレベルで情動の表出ができるいかという思いの中で、冠句という自由短詩を元にした技法「冠難辛句」が生まれて10年近くになる。この技法の治療・援助のかかわりの中で得られた結果に関しては、そのいくつかを作業療法における自由短詩を用いた治療のかかわりの例として、関連雑誌に連載の形で発表してきた。本技法と精神療法や表現療法として行われている詩歌療法との違い、およびこれまでに治療・援助のかかわりの中で表現されたもののいくつかを例に、本技法の用い方や自己表現活動としての臨床的有用性などについて述べる。

技法について

詩歌など言語を媒介とする療法は、広義の精神療法として行われている芸術療法（表現療法ともいう）に含まれ、詩歌療法と呼ばれている。精神療法や詩歌療法との比較から、本技法の特性について検討する。

1. 詩歌療法について

情動の発露や表現、比喩、象徴によるメッセージ性といった詩歌の療法としての特性は、絵画や音楽などと共に古くから経験的に用いられてきた。しかし、治療として意識的にその特性が利用されるようになったのは、1950年代末頃からである⁴⁾。もっとも当初は、詩作ではなく“bibliotherapy（読書療法）”としての用い方が中心であった。その後、詩を媒体とした集団精神療法が試みられるようになり、1970年代には詩の鑑賞と詩作を主媒体とする“poetry therapy（詩歌療法）”を行う施設やセラピス

トの教育施設も作られるようになった。現在はThe National Association for Poetry Therapy（国際詩歌療法学会）が組織され、Certified Applied Poetry Facilitator（認定詩歌ファシリテーター；CAPF）、Certified Poetry Therapist（認定詩歌療法士；CPT）、Registered Poetry Therapist（登録詩歌療法士；RPT）などの資格認定を行っている。

わが国においては、1969年に日本芸術療法学会が設立され、媒体としての芸術活動の一つとして詩歌が位置づけられている。ちなみに芸術療法は、絵画や音楽、詩歌、コラージュ、粘土や彫刻などの創作、箱庭、読書、写真、心理劇、ダンスなど、さまざまな芸術活動を用いた広義の精神療法として、レクリエーション的利用から表現精神病理学まで含んで語られている。その中で、詩歌療法は主に俳句や連句の詩作を中心に行われている^{3,5,6)}。そのため、“poetry therapy”と同様に詩作に興味があるか少し素養がある者が適応となる。

2. 冠句について

本技法の元になっている冠句は、松尾芭蕉（1644～1694）とほぼ同時代の元禄年間に、京都の堀内雲鼓（京都市の上徳寺に句碑がある）によって始められたという。俳句や川柳などの五・七・五の上の五文字を出題し、付句十二文字を募るもので、江戸時代に大流行した最短詩文芸である。明治時代には一時衰微するが、昭和時代の初期に、太田久佐太郎によって雑俳と扱われていたものから今の正風冠句が誕生した。

冠題（最初の五文字）が決まっていて、中の七文字と下の五文字の付句十二文字をつけることで作品が完成する。冠題と付句の間に「間」を開けることが特徴で、俳句にみられる季語などのようにいろいろな約束事がなく、話し言葉を使って自由に思いを表現できる。生活から生まれた短詩文芸の一つといえる。

俳句と同様に、句集が発表されたり句会がもたれるなど、現在でも同好の士による活動がみられる。筆者も、病むことを生きながら新聞や同人誌に投稿し何編も入選作がある人から精神

表1 「冠難辛句」の基本原則

- ① 冠句と同様に季語がない
- ② 詩歌のような修辞技法などにとらわれない
- ③ 冠題は誘発語としてもちいる
- ④ 話し言葉（口語）を使って自由に表現する
- ⑤ 字数制限を設けず、字余り字足らずを受け入れる

科作業療法の場で冠句を紹介され、簡単な手ほどきを受けたのが冠句との出会いであった。

3. 本技法について

冠句は、俳句や連句などに比べて、芸術作品としての創作技術の縛りは少ないが、やはり文芸としての要素はあり、詩作に対する素養の有無や言語化に対する精神病理面からの適否など、適応可能な層の限界もある。そのため、日本人になじみのある七五調のリズムを活かしながら、詩歌の創作性や芸術性にとらわれることなく、気持ちを表出する手段として精神科作業療法の臨床経験から「冠難辛句」が生まれた。「冠難辛句」は、「艱難辛苦を乗り越えて、元気を出して、病気も生きよう」と、冠句と艱難辛苦をかけた新技法の呼称（筆者の造語）である。

精神分析療法や詩歌療法のように言語を媒介としながら、ツイッターのつぶやきのように浮かぶ言葉をそのまま文字にする。そうすることで、論理的な意識脳としての左脳より、直感的で無意識的な右脳を優先させたもので、右脳俳句⁷⁾と称されるものに類似する。表1は、臨床における試行から生まれた基本的な原則である。この基本原則により、冠句よりさらに自由な、そして意識化が困難な情動の表出が可能になった。「冠難辛句」は、詩歌の日常会話を超えた一次過程的コミュニケーション（primary-process communication）としての機能を生かした、意識化が困難な情動の解除技法の一つといえる。

しかし、冠句よりさらに自由に表現できるとはいっても、治療プログラムとして行うと、なにか作らなければという創作意識が働いてしまう人も多い。その影響で、情動の一次過程的反映にならず、言語表出にともなう防衛や詩作と

同様のうまく作れないという技術的な未熟さによる抵抗がみられることがあり、ファシリテーターの運営技術が問われる。こうした状況を回避するには、きちんとした単独のプログラムとして行うより、パラレルな場や自然に雑談が始まる作業活動の中などで、冠題を誘発語として、頭に浮かんだことをそのままに言葉にするという雑談的な形式のほうがよい。

また、話された内容はあくまでも一次過程レベルのコミュニケーション、いわゆる日常的な雑談レベルにおける発散的なものとし、精神分析的な二次過程レベルの解釈や分析は行わない。

いくつかの例

本技法の試みの始まりは、精神科作業療法や、デイケア、作業所や授産施設などを利用している人たちの内、自発的に参加してくる人を対象とした冠句遊びであった。初期の参加者は、主には統合失調症や感情障害、神経症圏の障害、高次脳機能障害がある人たちなどで、軽度の認知症や精神発達遅滞がある人も加わることがあった。そして次第に、家族の集まりやヘルパー職など介護・生活支援にかかわっている人たちへと、対象層は広がっていった。

いくつか、実際の冠題に対して詠まれた句やその時の状況を紹介する。

1. 冠題：こころの病い

表2の①は、精神障害、精神病という響きがよくないからと「こころの病い」という言葉が流行るように使われるようになったときのものである。授産施設に通っていたAさんが、「この前、えらい人の講演会聞きに行ったら、『こころの病い、こころの病い』って言ってたけど、

表2 「冠難辛句」の作品例

		冠題	対句
(1)	i	こころの病い	病んでへんわこころの内まで
	ii		精神病がお化粧したの？
	iii		病んでるのはあんたらや
	iv		そう言われても何か変
	v		きれいに呼んでも気は重い
	vi		元気を出して病いも生きよう
(2)	i	統合失調症	名前変えても俺いっしょ
	ii		どう見えますか？ぼくら見て
	iii		なりたくてなったわけじやなし
	iv		誰がつくった？この病い
	v		つきあい始めて二十年
	vi		分かってもらえぬ重なる苦しみ
(3)	i	恋煩い	会って苦しい会わなくとも苦しい
	ii		知らなかつたよこの苦しさ
	iii		ああこの病いにあの病い
	iv		会うとつらくて休んでいます
	v		勇気を出してマフラー頼み
	vi		頼んだマフラー編み貸とられ
(4)	i	作業療法	許してくださいたくさんしました
	ii		もうええですわただ働き
	iii		ジユースもでんのか今度の作業
	iv		ホントに退院できますか
	v		置いてください死ぬまでここに
	vi		子どもだましのゲームに手芸

「私ら心病んでるんか？何や変な氣いやったわ」といったことがきっかけで生まれた⁸⁾。

精神疾患、精神障害、「こころの病い」、どのように呼んでみても、障害を「障がい」と読み替えてみても、本質的な問題は変わらない。このややもすると重くなりやすい思いが、「こころの病い」という誘発語により、「病んでへんわこころの内まで」、「病んでるのはあんたらや」、「きれいに呼んでも気は重い」などと、連想のように次々と表出された。

心を病んでいるというと、なにか悪いことをする人のような感じがする。悪いことを平気でする心を病んでいる人は他にいる。自分たちは、心の悩みや痛みは大きいが、心は病んでいないといった話から、iの句が生まれ、ii、iiiへと続いた。そして最後に、「どのように呼ばれよ

うと大変な病気に変わりはないから、元気を出して病気も生きるしかないね」と、viの句「こころの病い 元気を出して病いも生きよう」で一段落ついた。気がつけば1時間以上も、精神の病気とは何かということについてみんなが話し合っていたことになる。

2. 冠題：統合失調症

筆者が担当している精神科作業療法の講義の中で、作業所やグループホームを利用されている方たちと作業療法学専攻の学生たちとの交流の機会をもつことがある。精神分裂病の呼称変更の動きが始まり、統合失調症に変更されたころに、同様の機会があった。表2の(2)は、そのときに語られた言葉を句にしたものである⁹⁾。

そのときの交流の場では、統合失調症と名前

を変えても処遇が変わるものではないといったことや、病むことの苦しみ、そして病気が理解されないという重なる苦しみ、住宅探しや職探しの困難さ、など生活のしづらさについて語られた。それに対して学生が質問したり、感想を求められてそれぞれの思いを述べ、いつものように時間がすぎた。

そして最後に、統合失調症と診断されて10年あまりというYさんが、「これまで誰かに聞いてみたかったが、どうしても聞くことができませんでした。今日は、いろいろな話ができるので、思い切って聞きます」といって、学生たちに「今日いろいろな経験を話しましたが、今、目の前にいる僕たちを見てどう見えますか?」と問い合わせた。マスコミなどで何か事件があると、精神科の受診歴や精神疾患罹患の有無などが問題にされる。そのため、精神障害者は何をするかわからない、怖いというイメージをもつ人が多い。こうした報道があるたびに、複雑な思いをしてきた。しかし、こうして交流の機会をもち、言葉を交わした目の前にいる自分たちを見て、どのように思うかという問い合わせであった。この問い合わせには、学生たちは返事に詰まり、きちんとそれぞれの思うことをまとめて述べたいということで、後日レポートにしてYさんたちに送ることになった。

3. 冠題：恋煩い

「冠難辛句」の冠題に制限はなく、いろいろなものがある。表2の③の「恋煩い」は、作業所で気になる女性ができて悩むS君の話がきっかけで生まれたものである¹⁰⁾。

「僕ね、今作業所休んでるんや。行きたいけど行けなくて」というS君。いったいどうしたのとみんなに聞かれて「あのね、会っても苦しいし会わなくても苦しい、今は会うとつらいから作業所を休んでるんや」という。何が起きているのかと問われて、作業所に通っている女性で気になる人ができる、話しかけたいがドキドキして普通に話せないので、顔を見ると苦しくなるから作業所を休んでいる、休んでいると会えないから苦しいのだということでした。

誰かがしたり顔で「それは恋煩いや、不治の病いゆうて治らん病気や」。それを聞いて、「ええーー、あれって病気ですかあー、この病気（統合失調症）だけで大変なのに、また、あんな病気にもなってしまって」とうなだれるS君。「知らなかつたわ。誰かを好きになるとこんなに苦しいなんて。ほんとに、胸が痛いんですよ」。話は佳境に入る。募る思いを打ち明ける代わりに、編み物をしていたその女性に、思い切ってマフラー編んでもらえないかと頼んだら、「いいよ」という返事。そして待つこと1ヶ月、マフラーができる受け取ったときに、マフラーと一緒に編み貨を要求され、一気に天国から地獄に落ちたようなショックだったというS君。落胆して、その日以来作業所を休んでいるという話だった。

それを聞いていたFさんが、「恋煩い？大丈夫よ。時間が薬」とすかさず返した。病気も人生も達人にならないといえない言葉。それを聞いたS君、真顔で「時間が薬か、そやけど、どうやって飲めばええん？」。キヨトンとするS君を前に、みんなで大笑いした。

4. 冠題：作業療法

作業療法士という資格ができるまでは、生活指導やレクリエーションなどと共に、病院内の清掃作業や下請け仕事、農耕園芸などの作業が、看護職や作業指導員の下で生活療法¹¹⁾の一つとして行われていた。その作業を用いたかわりが、仕事療法とか作業療法と呼ばれていたため、いろいろ誤解が生じた¹²⁾。

表2の④の「作業療法」という冠題は、その生活療法の中で形骸化した仕事療法という名の作業療法を経験した人たちとの話から生まれたものである¹³⁾。iとiiは、作業療法の処方がでて、病棟まで導入面接に出向いたとき、何十年も入院していた人の言葉である。退院の当てもないまま、毎日毎日、何年も、病院内の清掃や白衣のクリーニング、配膳作業などをしてわずかな金銭を得ていたという。「ただ働きのようなもんや」といったその人の言葉が今も耳に残っている。

表3 言語を媒介とする療法との比較

	精神分析療法	詩歌療法	冠難辛句
媒介	会話	文字・会話	文字・会話
表出形態	二次過程	一次過程レベル	一次過程に近い二次過程
一次過程的加工	ほとんどない	多い	みられることがある
解釈・分析	行う	原則として行わない	行わない
抵抗	起きやすい	少ない	ほとんどない
防衛的修飾	ない	少ない	ほとんどない
治療的效果			
発散・解除	△	○	◎
カタルシス	◎	○	○
交流の醸成	×	○	○
自己洞察	◎	○ (解釈による)	△
適応対象	限定 (主に神経症圈)	やや限定	広い (急性期を除く)

◎: 大きい ○: ある (条件による) △: 少しある ×: 特にない

作業をしたら退院できるかということも、作業療法の処方がでるたびに耳にした。どこにも行くところがないから死ぬまでここ（精神科病院）に置いてほしいといった人たち。家はあっても帰る家がないため、退院する当てもなく作業をして過ごした社会的入院と称される人たちの多くが、今、高齢化して亡くなっていく。入院医療中心から地域生活中心へ、大きく転換しようとしている精神科医療の中で、作業療法は、再びこのような言葉を耳にすることがないよう、立ち位置をしっかりとさせなければならない。

考 察

1. 言語を媒介とする他の技法との比較

本技法の特性を、言語を媒介とする精神分析療法、詩歌療法と比較すると、表3のように示すことができる。媒介は言語であるが、精神分析療法は会話が中心で、自由連想法のように技法によっては、一次過程的な表現が部分的にみられることがある。しかし、表出から洞察に至る過程は意識された二次過程の表現であり、表現されたものに対する解釈や分析がなされるため抵抗が起きやすい。左脳の言語領域が機能するため言語化にともなう防衛が働き、言葉にすることに抵抗が生じるためである。そのため、十分配慮されて行われれば深い洞察は得られる

が、療法として行うファシリテーターの技量が問われる。また、言語化や洞察が可能かどうかという対象者の認知機能や病理特性から、適応対象も主に神経症圈が中心となる。

また、詩歌療法は文芸作品の鑑賞もあるが、俳句や連句などの詩作が中心であるため、直喻や隠喻などの比喩、擬態、擬人、省略、誇張、パロディ化、転用語など、さまざまな修辞技法が用いられる。そして、詩歌のリズムをもった短い言葉は、音楽表現や絵画、夢などと同様に、直感的・無意識的な表現となる。そのため、表出されるものには、圧縮や置換、投影、象徴化といった一次過程的加工を受けた表現がみられる。こうした適応的な防衛的修飾ともいえる表出形態が、精神分析療法に比べ抵抗を減少させ、深い交流の醸成をもたらすと共に、発散、カタルシスにつながると考えられる。しかし、詩歌療法の特性で述べたように、詩作に興味があるか少し素養がないと難しいため、創作意識が強くなると技術的抵抗が生まれる。こうした意味で適応対象が限定される。

それに対して本技法は、文字や会話を媒介にするが、表1の基本原則で示したように詩作としての季語などの約束事や字数制限がなく、修辞技法もない。芸術性を問わない自由な表現が特徴といえる。詩歌にみられるような圧縮や象

微化、また表2の①のiiの擬人化表現などがみられることもあるが、誘発語で浮かんだことをそのまま言葉にするため、一次過程に近いが防衛的修飾の少ない二次過程としての会話表現になる。そのため、精神分析療法にみられる言語化への抵抗や詩歌療法にみられる技術的抵抗による、情動の表出に対する抵抗が少ないと特徴である。

本稿あげた例やその時の状況からうかがえるように、本技法の葛藤の表出と適度な抑制という防衛機序をもつ表現特性がカタルシスをともない、日常の会話を超えた深く味わい深い交流の時間を生みだす。そしてその交流が、葛藤の受容や自然な洞察、解決をもたらし、ときに自己変容に至るものと考えられる。

2. 誘発語としての冠題の機能

表2の作品例の「こころの病い」にしろ「統合失調症」という呼称変更にしろ、通常の会話では話題になりにくい課題である。また会話を中心とした集団精神療法の場であっても、このような課題や自己の内面に関するものは意識化や言語化に対して心理的な抵抗が大きく働くため、深い思いや情動は表出されにくい。そのためファシリテーターの技術が問われる。

こうした意識化や言語化に抵抗が大きいもの、それに絡む葛藤や深い情動が誘発語を用いる自由短詩の形式を取ることで、抵抗や抑制が働く前の一次過程に近いが防衛的修飾の少ない二次的表現として表出される。意識的表出が困難なことが、誘発語により自然に語られる。こうして、誘発語に誘われてつぶやきのように浮かんだ言葉から生まれた句をきっかけに、それぞれの思いが述べられる。このように冠句では、無意識や前意識の内に閉じ込められている、さまざまな思いや情動が表出されることで、緊張がほぐれ会話が始まる。

誘発語としての冠題は、前述した季語などの約束事や字数制限がなく、修辞技法もない、芸術性を問わない自由な表現という特性と共に、発散、カタルシスをともなう交流の場を生む誘発語の重要な機能であり、本技法の中心となる

重要な特性といえる。

3. 本技法実施上の留意点

一端、会話が始まれば、その流れや場の中で留意することは、通常の言語を媒介とする集団精神療法などとほぼ似たものになる。ただし言語でありながら、非言語機能をもっている自由短詩技法は、言語としての特性がある故に、作業療法における他の創作・表現活動に比べて、表出された内容がより具体的になる。そのため、強いカタルシスをもたらす可能性がある一方、言語として具体的に表出されることで、後になって表出しすぎた（いいすぎた）という思いから、いつてしまったことが負担になることもある。

こうしたリスクを回避するためには、誘発語により自発会話が始まったとしても、ほどほどにとどめる、語らせすぎにならないようにする配慮が必要である。さらに、高揚したままの気分で終われば、静まらない気分が生活の場に支障を来すこともある。一区切りついで終了するときには、小集団体験終了時¹⁴⁾と同様に、クールダウンなどの配慮を怠らないことが大切であろう。

終わりに

長期の入院生活や療養生活の中で語られた、病いを生きる人たちの言葉は、ほろ苦くも、弱さの力のような、柔らかなしたたかさがある。ときには、治療・援助で寄り添う者の本心を見抜いたかのような、鋭い表現もある。直接自分の気持ちを伝えるには重すぎることやうまく伝えきれないことが、冠難辛句という自由短詩の力を借りて大きな心理的負担を伴うことなく表現された。このような技法の誕生に寄り添ってもらった、病いを生きる人たちに感謝し、共に生きる場でこの技法を自然に活かせるよう精進したい。

文 献

- Pietropinto A: Poetry Therapy. New Dimensions in Psychiatry Vol.2, Willy-Interv-

- science, New York, 1977, pp.214-239.
- 2) 飯森真喜雄：詩歌療法の諸技法とその適応決定. 大森健一, 高江洲義英, 徳田良仁・編, 芸術療法の諸技法とその適応決定（芸術療法講座3）, 星和書店, 東京, 1981, pp.89-110.
- 3) 飯森真喜雄：詩歌療法. 徳田良仁, 式場聰・編, 精神医療における芸術療法, 牧野出版, 東京, 1982, pp.183-194.
- 4) National Association for Poetry Therapy: Poetry therapy. NAPT, (on line), available from <<http://www.poetrytherapy.org>>, (accessed 2011-06-20).
- 5) 飯森真喜雄：芸術療法の現在. こころの科学 92: 10-17, 2000.
- 6) 浅野欣也：詩歌療法. 臨床精神医学講座15巻, 中山書店, 東京, 1999, pp.114-127.
- 7) 品川嘉也：右脳俳句と芸術体験と宇宙意識. 現代のエスプリ 279: 121-127, 1990.
- 8) 山根 寛：冠難辛句—こころの病い. 精神認知とOT 2: 248-249, 2005.
- 9) 山根 寛：冠難辛句—統合失調症. 精神認知とOT 2: 342-343, 2005.
- 10) 山根 寛：冠難辛句—恋煩い. 精神認知とOT 2: 438-439, 2005.
- 11) 小林八郎：生活療法. 江副勉, 他・編, 精神科看護の研究, 医学書院, 東京, 1965, pp.174-288.
- 12) 鈴木明子・司会：座談会／OTにとっての精神医療の壁. 理作療法 9: 840-848, 1975.
- 13) 山根 寛：冠難辛句—作業療法. 臨床作業療法 5: 262-263, 2008.
- 14) 古屋健治：ファシリテーターの役割と機能. 松井紀和・編著, 小集団体験—出会いと交流のプロセス, 牧野出版, 東京, 1991, pp.176-195.